被爆者は訴える
ふたたび被爆者をつくるなと

宮本須美子　（当時７歳）
札幌市

戦後70年を迎える日本で私たちは今平和で豊かな毎日を送っている。しかし、70年前の日本は、一日に何度も警戒警報や空襲警報のサイレンが鳴り身も心も休まる日がなかった。母の生前の言葉が思い出される、「戦争や原爆で亡くなられたたくさんの方々の犠牲の上に今がある」と。

1945年、私は７歳であった。その頃は名古屋に住んでいたが、名古屋は敵機と日本の飛行機の空中戦が間近で見られるくらいに緊迫した毎日であった。名古屋の三菱航空機（現在の三菱重工）に勤務していた父は、この年の１月３日の空襲で帰らぬ人となった。そのため我々家族（母、兄、姉、妹そして私）は父の故郷であり母の両親が住む長崎の戸町へ移った。長崎も毎日の様に空襲警報が鳴っていた。

８月９日の長崎はよく晴れた穏やかな日で、私たちもどこかくつろいだ気分でいた。ところが急にＢ29のゴーという音が聞こえ、何だろうと思う間もなく警戒警報が空襲警報に変わり、私たちはあわてて近所の人たちと防空壕に走った。それから何時間が過ぎただろうか、外に出てみるとあたりが薄暗く妙に静まりかえっていた。11時２分、長崎の上空で１個の原子爆弾が炸裂していたのである。

爆心地から６㎞離れた防空壕に入っていた私たちは、何が起きたか全くわからないままだった。夕方兄が学校から帰り、こしき岩に陣地構築に行っていて九死に一生を得た、そのまま学校にいたら死んでいただろうと話していた。兄によれば、昼頃になって山越しに閃光が見え、すさまじい爆風と熱線が押し寄せ、黒い雲がかかり雨が降った。雲に追われるように逃げた。長崎の街は炎に包まれていたと言う。

それから２日後、米軍が上陸して老人や子どもは殺害されるという流言飛語が流れたので、父の実家に疎開することになった。ところが、そ

こに行くには爆心地を通らなければならない。母は背に腹は代えられないと思ったのだろうか、12日の夕方家を出た。兄が大八車を押し、私と姉はランドセルを背負い必死に歩いた。爆心地は焼け野が原となり、死臭が漂い、大橋の下には水を求めて人々が重なり合って亡くなっていた。私たち幼い者にとっては悲惨な光景であった。その日は野宿をした。不思議なことに、一滴の水もとらず何も食べていないのにお腹がパンパンにふくれていた。悪臭に対する拒否反応だったのかもしれない。その悪臭はごく最近まで忘れることはなかった。

原爆投下直後の爆心地を通った私たちは大量の放射能を浴びたと思う。５人とも妙に身体がだるく、数カ月後に母と妹に原爆症が出た。兄も原因不明の病気となった。疎開先では沢山の方々にお世話になったが、特に村医の賀来先生は一人ひとりの命を大切に扱って下さり、私たちは感謝の気持ちで一杯だった。

被爆者たちは原爆症の後遺症などを抱えながらその後の70年を生きてきた。私の家族はすでに母も姉もガンで亡くなった。娘も今リンパのガンで苦しんでいる。たった一発の原子爆弾が７万４千人もの人間の命を奪った。その後も突然に現われる原爆症で多くの被爆者が命を落としてきた。そして目に見えない放射能の恐怖は今も続く。こうした非人道的な核兵器は世界から一刻も早く無くさなければならない。

世界中の皆さん、核兵器禁止条約の一日も早い実現をお願いします。そのために被爆国日本は先頭に立って被爆の実相を伝えていく義務があるのではないかと思います。

ふたたび愚かな行為を繰り返さないために、そして子どもたちの将来のためにも、私たち被爆者は命のある限り核兵器のない平和な世界の実現に向かって行動を続けます。